

頻出！ セクシュアル・ハラスメント重要構文——加害者の言いわけ集

勇気を出して被害を訴えても、加害者はこちらの言葉をまともにとりあわず都合のいい言いわけで逃げがち。そんな言葉を真に受けると精神的ダメージをくらってしまいます。でも、セクハラ加害者の言いわけにはお決まりのパターンがある！ あらかじめ知って構えておけば、そんなべらべらの「口撃」なんかに心傷つかずにいられます。反射的に反論を打ち返せるようになるまで反復しましょう。ぜひプリントアウトして丸暗記してみてくださいね。

言いわけ	反論例と解説
「悪気はなかった」 「そんなつもりはなかった」 「性的な意図はなかった」	あなたの「つもり」は聞いてません。あなたが何をしたかが問題です。 ※ セクハラ判断基準は、相手が「同意しているかどうか」「不快とを感じるかどうか」。行為者の意図や悪意の有無は関係ない。対等な存在として相手の感覚を尊重するという人権意識が欠如している。
「対等な恋愛関係だった」 「ただのデート」 「自由恋愛」	こちらはそうは思っていません。勝手に幻想されて迷惑です。 ※ 相手が断れない／断りにくいような不均衡な力関係の場で、自分は安全な立場に身を置いたまま権力を行使しているという自覚がないのが一番の問題。
「最初からはっきり嫌だと言えばよかったじゃないか」 「NOと言わない方が悪い」 「断ることもできたはずだ」 「言ってくればよかったのに」	NOと言えない関係性で生じるのをセクハラと言うんです。 ※ そもそもハラスメントというものは、NOと言ったり逃げたりできない立場にあるからこそ生じる権力関係の問題。法的に言えば〈支配従属関係〉。「イヤ」「NO」「お断りします」と言った場合に相手が不利益を被るような関係性であることに気づいていないか、あえて気づかないようにしている。
「ほとんど覚えていない」 「そんなのいちいち覚えてない」	覚えてないほどやってるんですか？ ※ 加害に自覚がないことのあらわれ。セクハラという依存行為にどっぷりとつかってしまっていてそれが日常茶飯事であったともいえる。常習犯であったという可能性も。なお、言うまでもなく、記憶がないことは免責の理由とならない。
「距離を縮めるためにスキンシップは必要」 「親愛の情を示しただけ」	触らなくても人間関係は築けるだろ。 ※ 他者の身体は他者のものだという人権意識が希薄すぎる。もしも、どうしても触らなければならない事態であると判断した場合——いったいどんな事態か想像できないけど——でも、相手の許可を得てください。
「誰にでもする愛情表現」 「コミュニケーションの一つ」	上司にも同じことしてんの？ ※ この返しは汎用性が高くて便利。加害者は自分より弱くて抵抗できなさそうな相手を選んでいる。他者のパーソナルスペースは尊重しよう。
「これはプライベートな問題だから、当人同士でなければわからない」 「個人間の問題」	そもそも公の場にプライベートな恋愛感情持ち込んできたのは誰だろう？ ※ 職場や学校という本来プライベートではない場所に、加害者が一方的にプライベートな恋愛感情を持ち込んだことによって被害が生じている。

「はっきりと拒否はしていませんでしたよ」	<p>はっきりとした「合意」の確認はあったわけ？</p> <p>※ 「合意」と呼んでいいのは明確な YES の意思表示だけ。2人で出かけても、いっしょに食事しても、お酒を飲んでも、たとえ自分の部屋に相手が来たのだとしても、それはイコール合意ではない。</p>
「相手も期待していたはずだ」 「間違いなくあれは合意だった」	<p>都合のいい夢みてたんですかね。</p> <p>※ 同上。自分がそう思っただけにもかかわらず、勝手な願望と都合のいい想像を相手に押し付けている。</p>
「嫌なら必死に抵抗したはずだ」 「あとになって文句を言うのか」	<p>あとでも先でも、わたしは自分が言えるとき、言いたいときに文句を言います。</p> <p>※ 職場でのセクハラ被害者の6割は泣き寝入りしている。拒絶されると逆ギレする加害者も多く、中傷されたり仲間外れにされるのもよくあるパターン。被害者は恐怖やショックから固まってしまうことも。抵抗できなくて当然。</p>
「強制したことはない」 「命じてはいない」 「無理強いなどしていない」	<p>それ詐欺師が判押させるときの言い分と一緒に。</p> <p>※ すでに支配従属関係にあるところでは無理強いも押し付けも必要ない。「俺と寝なかつたら〇〇するぞ」といったあからさまなセリフを吐く人など滅多にいないのが現実。セクハラのひとつが微妙な関係性のなかで生じている。</p>
「冗談のつもりだった」 「冗談もわからないのか」	<p>えっ、どのへんが？ どこが面白いのかわからなかったんで解説してもらえます？</p> <p>※ もっとも多い責任転嫁発言の一つ。自分の行為を軽めに見せるとともに、「(加害者の) 真意を誤解した相手が悪い」と被害者をカタブツ扱いして非難している。誰にでも「性的なことについて話したくない」「触られたくない」という性的自己決定権・性的プライバシー権が保障されているのだから侵害してはならない。</p>
「誤解を与えてしまって申し訳ありません」	<p>それ謝ってないから。</p> <p>※ 一見、反省したポーズを装ってはいるが、これも実際は「悪いのは誤解した相手の方」と責任転嫁してるだけ。ってか他にどう解釈の余地があるんだよ？</p>
「傷つけてしまったのならすみません」 「感情を害してしまったのならすみません」	<p>きみ、謝り方知ってる？</p> <p>※ これも同様、反省しているようにみせかけて、その実は「その程度で傷つくあなたがおかしい」「繊細すぎる」という被害者非難。ハラスメントは心を傷つけた、感情を傷つけた、というレベルの話ではなく、人権の侵害。謝罪するなら仮定や条件をつけずに謝罪して。</p>
「一瞬、魔が差した」 「ほんの一時の気の迷い」 「つい出来心で」 「たった一度間違えただけなのに」	<p>矮小化でたー。</p> <p>※ ハラスメントが一瞬の衝動で起こされていることは稀。加害者の多くが自分に有利な環境を利用したうえで、してはいけない相手としてもいい相手を冷静に見分けて犯行に及んでいる。過失などではなく故意の犯行。</p>
「酔っ払っていたから」	<p>飲酒運転で人轢いてもそれ言うか？</p>

「酒の席の上でのこと」	<p>※ 酔っていたからといってやったことが消えるわけではないし、酔っていても誰にでも手を出しているわけでもない。また、酔っていたはずなのに状況を細かく説明して弁解するのもよくあるパターン。近年ではアルコール・ハラスメントとしても被害が認められる。酒が悪いんじゃない、飲んだ人間が悪いことするんだよ。</p>
<p>「(性行為などは) 何もしてないじゃないか」</p> <p>「触ってもいないのに大袈裟な」</p>	<p>人が嫌がることはしちゃダメだよ。大事だから覚えとこうね。</p> <p>※ セクハラとは「相手の望まない性的言動」であり、当然言葉だけの被害も含まれる。それによって学習・研究又は労働環境を著しく悪化させる行為を広く指すのであり、セクハラは軽重によらず許されない人権侵害であるという根本的な認識が欠如している。</p>
<p>「わたしはそんな異常者ではない」</p> <p>「犯罪者扱いするな」</p>	<p>犯罪者の一歩手前で止めてもらえてよかったじゃん！</p> <p>※ セクハラのは加害者は異常性欲の持ち主であるという偏見のあらわれ。そういった加害者は一部にはいるものの、現実にはセクハラで訴えられる加害者には大学教授や会社の管理職など社会的地位の高い者も多い。</p>
<p>「他にもっとひどい被害だってたくさんある」</p> <p>「たかがこの程度のことで」</p>	<p>いや、ガマン比べしてるわけじゃないんで。</p> <p>※ 自分がもたらした被害の深刻さと向き合えずに相対化をはかるセリフ。セクハラ被害者は PTSD やうつ病に罹りやすくなることが明らかになっており、その悪影響は人生に長く尾を引くことになる。</p>
<p>「手をかけてあげただけ」</p> <p>「同情のあまりなんとかしてあげたかった」</p>	<p>こっちからお願いしたことあったっけ？</p> <p>※ 加害者には「～してあげたのに」「～してやったのに」という見返りを期待しているかのような発言もよく見られる。「この子のために」という過剰な思い入れは危険。同情や哀れみの視線は自分優位の発想からうまれるということを心得て。</p>
<p>「(外見について) 褒めてやったのに」</p> <p>「褒め言葉なのに」</p>	<p>いりません。</p> <p>※ 自分からの性的な目線は賞賛であって、褒められれば名誉に違いないというはなはだしい勘違い。学問や仕事をしにきている場で、外見や容姿で評価されることになれば、自尊心が傷つくもの。評価するなら能力を評価して。</p>
<p>「こんなことで大騒ぎするなんて男を知らないのか」</p>	<p>今はね、恋愛の話じゃなくて人権の話をしてるんだよ。わかる？</p> <p>※ これも被害者の側に問題があるかのような責任転嫁。性的なやりとりは大人の余裕を示すものだと勝手に決め付けているが、他者の価値観や感覚を尊重できないのはむしろ未熟さのあらわれ。</p>
<p>「他の子はみんな平気だったのに」</p>	<p>いやそれ必死でガマンしていた可能性。</p> <p>※ そもそも他の子と同じである必要もない。</p>
<p>「そんなヤワな女(男) じゃないはずだ」</p> <p>「彼女(彼)は“被害者”なんかじゃない」</p>	<p>きみの脳内の「被害者像」押しつけるのはやめような。</p>

	※ 現実の被害者は多種多様。
「派手な外見・刺激的な外見に挑発された」	つまり街中で露出の激しい人を見かけたら毎回発情して手出してるってこと？ ※ 抵抗できない相手を選んでいる。また当然のことだが、誰にだって自分のしたい格好をする権利があり、それは「加害してもいいよ」という合図ではない。なお、他人の服装に口出しすることはプライバシーや自己決定権の侵害ともいえる。
「あいつとはよくてどうして俺とはいけないんだ」	ご存じないかもしれないけれど、わたしにも選ぶ権利というものがあるんですよ。 ※ 「あいつにいいなら俺でもいいはず」っていう魂胆がみえみえ。同じ行為でも親しい人にされるのと、そうではない人にされるのでは意味合いが違って来る。
「むしろ被害者はこっちです」	いや、加害者も自分じゃね？ ※ 加害者の多くは強い被害者意識とそれを承認して欲しいという欲求に満ちており、自分の行為を真に反省することができない。そのため、被害者や、自分を処分した大学や企業を訴える〈ファイトバック〉のケースもたびたび生じている。
「家族に相手にされず寂しくて…」 「辛い人生を送ってきました…」	だからどうした。 ※ 寂しさを感じるのと加害することの間には深く大きな断絶がある。向き合うべきなのは自分の寂しさではなく、被害者に負わせた傷と損害。
「そんなこと言われたら何もできませんよ」	え、何をしようとしたの？ ※ アホくさすぎて解説するのも面倒くさくなってきた。
「天気のことしか話せないじゃないか」	天気の話、いいじゃないですかー（棒）。
「彼女／彼のことならよくわかっている」	あなたがわかっていると思ってる「わたし」はぜんぜんわたしじゃありません。
「これがわたしのスタイル」 「昔からずっとこうやってきた」	他にもたくさん被害者いるっていう自己申告？
「謀られた」 「ハメられたんだ」	おまえら陰謀論好きな。
「わたしには養わなくてはならない家族がいるんです」	で？

参考文献

- 牟田和恵『ここからセクハラ！ アウトがわからない男、もう我慢しない女』（集英社、2018）
 沼崎一郎『キャンパス セクシュアル・ハラスメント 対応ガイド』（嵯峨野書院、2010）
 北仲千里・横山美栄子『アカデミック・ハラスメントの解決』（寿郎社、2017）
 金子雅臣『壊れる男たち——セクハラはなぜ繰り返されるのか』（岩波書店、2006）
 内田良『学校ハラスメント 暴力・セクハラ・部活動——なぜ教育は「行き過ぎる」か』（朝日新聞出版、2019）
 白河桃子『ハラスメントの境界線 セクハラ・パワハラに戸惑う男たち』（中央公論新社、2019）
 池谷孝司『スクールセクハラ なぜ教師のわいせつ犯罪は繰り返されるのか』（幻冬社、2014）
 白井久明・水島広子『セクハラ これが正しい対応です』（中央経済社、1999）
 水谷英夫『第4版 職場のパワハラ セクハラ メンタルヘルス』（日本加除出版、2020）
 櫛田眞澄『セクハラ・最後の人権課題 日本の状況を中心に』（ドメス出版、2019）